

## ご挨拶

大浦 武彦

日本褥瘡学会理事長



日本は急速に高齢社会となり、2025年には「寝たきり」高齢者は230万人に達すると推定されている。

また、65歳以上で死亡した人の「寝たきり」日数は平均8ヵ月と報告されているが、「寝たきり」となると褥瘡の発症率が高いことから、これらの予防と治療が社会問題となっている。

現在、褥瘡の分野における褥瘡の研究・開発、治療結果などの討論や評価は、医師グループ、看護婦グループ、医療工学系研究者を含めた医療福祉機器グループの3つのグループにおいて、それぞれ個々に行われていたが、残念ながらその活動は活発とはいえず、またお互いの間に密な連携がなかった。

このような現状と問題を解決する為には褥瘡治療や研究に携わるものが一堂に集まり討論・評価し、切磋琢磨する場がなければならない。また褥瘡に関する情報、研究業績の記録を保存しておく必要もあり、ここに日本褥瘡学会が設立された。

日本褥瘡学会設立に当たって、米国のように学会ではなく Advisory Panel 形式として主だった20数人の人々が集ってガイドラインを作ったり、講習会を行う形式にするか、あるいは学会形式とし、会員の研究発表や報告検討が自由に発表できる場とするか、迷ったところである。

また、最初は学会ではなく研究会として発足させ5、6年後に学会に発展させる、という意見も出されたが、学会とした方が看護婦・介護士・コメディカルのスタッフが出席しやすいとのことで、当初より学会設立となった。

結局、一般の会員が発表できる日本褥瘡学会を設立し、第1回学術集会在ここに開催されることとなったが、今後はこの学会としてのメリットを十分活用して大いに発展させるような運営をしていかなければならないと、重責を感じている。

学会の構成員としては、褥瘡や創傷の治療に携わる広範な医療関係者、すなわち医師、看護婦(士)、介護職員(介護士・ケアワーカー)、栄養士、薬剤師、理学療法士・作業療法士・臨床工学技士、医用工学研究者、薬剤開発技術者などの参加を得て、各界を網羅した学術団体「日本褥瘡学会」となった。

日本褥瘡学会では褥瘡の予防から治療まで、広範、かつ多岐にわたる問題について研究、開発の検討を行うと共に、治療経験やその問題点についての討議と意見交換の場を提供し、その成果が臨床応用されるよう啓発・教育活動を行うことを目的としている。

具体的には、褥瘡の発生、治癒促進等に関する基礎研究の推進と臨床への応用、医薬品、医療材料、医用工学機器（減圧・除圧器材等）の研究・開発と普及、褥瘡に悩む患者さんや家族の心のケアなどに貢献することが期待される。

日本褥瘡学会では学会誌を発行し、褥瘡に関する論文・報告書や情報を集め、褥瘡に関する記録の集積を行う予定である。

本学会の設立のもう一つの目的として、わが国に合った褥瘡の評価基準を作成するとともに、褥瘡に関する現場の声を医療行政に伝達する活動も、本学会の大きな使命の一つと考えている。

---

〔略歴〕 おおうら たけひこ (Takehiko OHURA, M.D., Ph.D.)  
昭和 37 年 3 月 北海道大学大学院医学研究科修了 (医学博士)  
昭和 45 年 6 月 北海道大学医学部皮膚科学講座助教授  
昭和 53 年 6 月 北海道大学医学部形成外科学講座教授  
平成 5 年 4 月 北海道大学医学部附属病院院長就任  
平成 7 年 3 月 北海道大学名誉教授  
平成 7 年 4 月 医療法人溪仁会会長 現在に至る